

2004年3月28日に東京渋谷教会で行われた講演会

「ドミニコを動かしたもの」 スール・マリア・ベネディクタ武田

皆さん、おはようございます。

私はこういうふう（講演者の名前を）紙にかいていただいたところに座るという経験は初めてでございます。なんとなく戸惑っておりますけれども、ドミニコを知ろうとして集まってくださった皆様がこんなに大勢いらっしゃるということ、大変幸せで、嬉しく思っております。

今、田中神父様が「あまり知られていないドミニコ、およびドミニコの兄弟達、先輩たちを知らせなければ」とおっしゃいましたけれども、先日も私は「ドミニコについて書いた日本語の本って、ありませんね。」と言われました。最近ではスペイン管区の方々もだいぶ書いていらっしゃいますし、何冊かあるのですが、確かに他の会の書籍に比べれば少ないと思います。でもこれは日本語だけの問題ではないのです。10年ぐらい前にラテンアメリカの神学者のフェリチッシモ・マルチネスという神父様がお書きになった「ドミニコ伝」の中の冒頭、書き出しがこうなのですね。「兄弟たちの怠慢だろうか、慎みだろうか、問題は今なお解決していない。ドミニコは公にその聖性が認められるまでに10年以上かかっている。同時代のフランシスコは死後二年足らずで列聖され、パドアのアントニオは1年も経たないうちに列聖された。聖ドミニコはどうしたのだろうか？彼の生活が福音的であることや、彼の徳が英雄的であることに疑いが持たれたのであろうか？しかし、今日はどうであろうと考えるとこの疑問も解ける。列聖されたにも拘わらず、多くの人に知られないままである」と書いていらっしゃいます。そして「それは我々の怠慢だろうか、あるいは慎みであろうか」と書いていらっしゃいます。ということで、あまり知られていないという

面があるのですが、ここはドミニコ教会ですので知っていただきたいなと思いますし、皆様はすでにご存知なのでもっと知りたいと思っていらっしゃるのだと思うのです。それで皆様のご期待がどういう面かということは千差万別だと思いますので、1時間というお時間をいただいたのですが、私は最後の10分くらいは質問に答える形でお話したほうが良いかなと思っております。

今日は四旬節の第五主日です。来週が受難の主日、その次が復活という、教会の典礼歴の丁度最高潮というところでは、今日のミサの中でジラル神父様もおっしゃったのですが、受難の中でこのドミニコについて考えるということは大変意味があると思います。聖ドミニコの絵でよく知られているものの一つに、ドミニコが本を読んでいる、黙想している絵があります。あれはフラ・アンジェリコがフィレンツェのドミニコ会のサン・マルコ修道院（今は美術館になっているのですが）の兄弟たちの修室一つ一つにその兄弟が好んだ神の玄義の絵を描いたものなのですが、その中の一つには、中央にご受難の場面があって、その向かって右下にあの絵が描かれてあります。ドミニコが受難を黙想しているところです。ドミニコは説教者の生活は受難で始まると確信していられました。それで彼は受難のキリストに心を合わせることによって人々の救いのために、すべての人の救いのためにという彼の大望を成し遂げようと、そのために精進なされたのです。

それでドミニコは兄弟たちに絶えずキリストの受難を黙想するようにと勧めました。その伝統を受け継いだサン・マルコ修道院のノヴィシア（これからドミニコ会士になろうとして集まってきた人々）の部屋は全部、十字架のキリストのもとで黙想しているドミニコの絵、そこから説教者兄弟の生活が始まるのだということです。私たちも受難・復活の記念を前にしてキリストに倣おうとしたドミニコに倣いたいと思います。受難の黙想ということは憐れみの愛である神の救いの業の完成の黙想、受難と栄光は一つの出来事の両面、受難の時とい

うのは栄光の時、イエスが「わたしの時」と、福音でおっしゃっています。受難は苦しみと死で終わるのではなくて、栄光で終わります。受難なしに栄光はない。そして聖人はみな、イエス・キリストに倣おうとしたわけですが、私たち一人一人も皆、神の似姿、「神はすべての人を、ご自分の似姿にお造りになった」というわけですので、我々も神の似姿であります。でも、すべてにおいて、あらゆる面において完全に神の似姿であるのはイエスさまだけです。私たちはその何かの面を映し出すように呼ばれていると思います。聖ドミニコは特にイエスの憐れみ（compassion 共苦共感）、ともに痛んで、そのともに痛む人々に対する憐れみ、その面をドミニコは生きた人だと思えます。私たち一人一人も何かに呼ばれています。自分は何に呼ばれているのだろうかと考えるときにもしていただけたらいいなと思えます。

マルコ福音書の中に次のように描かれています。「多くの人々は彼ら（イエスと弟子たち）が出て行くのを見、それと気づき、ほうぼうの町々から駆けつけ、彼らよりも先に着いていた。舟を降りるとき、イエスは大勢の群集をごらんになり、牧者のない羊のようなそのありさまを、哀れに思い、いろいろと教え始められた（マルコ六章 33～34 節）。群集を哀れに思い、いろいろと教え始められた。そしてこの後で、パンの奇跡もあります。キリストの教え、印は人々への憐れみというところに始まって、行われていきました。そして聖ドミニコの生涯におきましても、ドミニコが進むべき方向を見つけ出したのも人々との共苦共感、憐れみだったと思えます。お手元に今歌った歌の反対側にドミニコの生涯の簡単な年表があると思いますが、ちょっとご覧下さい。まず 1171 年ごろスペインのカスティリア地方のカレルエガに生まれました。「ころ」とつけるのに、なぜ「1」までつけるのかと思われるのではないかと思います。よく 1170 年ごろと書いてある本もあります。私も初めは 1171 年ごろと書き始めていたのですが、というのはこの年が一番それらしい年、70、71、72 年までは狭められ

るのだそうですが、とにかく「ころ」とつけるのなら 70 年のほうがいいであろうと、私もそちらに賛成しまして 70 年ごろと一時期書いたのです。ところが昨年の夏ボローニャに参りましたときにボローニャの冊子(パンフレット)に 1171 年ごろと書いてあったのでやっぱり 71 年ごろにこだわることにいたしました。ボローニャというのは聖ドミニコがそこで亡くなって、今も葬られている教会です。というわけで、ドミニコは 1171 年ごろに生まれました。1177 年ごろにだいたい六歳になるとちょうど日本の寺小屋と同じように、教育を受け始めました。むこうは教会ですが。そして 14 歳ごろになると大学へということでパレンシアの大学へ入学します。オレンジのバレンシアではなくパレンシアですので、あとで後の地図で確認いたします。このパレンシアの大学生活の時代に一つ大きなドミニコの特徴が表れる出来事がありました。それは大飢饉があったときでしかも回教徒との戦いの後に疲弊していた土地であります。そして南のほうのまだ戦いの終わっていないところからの難民もありという中で、飢饉で苦しんでいる人、死んでいく人たちがいたときに、ドミニコが自分の持ち物をみんな売り、書物までも売り、最後には自分の聖書、そしてその中には注釈を自分の手で書き込んでいた聖書までも売ってパンを施したと言う出来事があります。その出来事はそのあたりで有名になって、ドミニコの列聖、亡くなった後で列聖の証言があったときに、そのことを言っている人が何人も出てきました。ドミニコは哀れみに心を動かされたときに自分が学んだこと、聖書で学んだことを実行したのです。ドミニコは記憶力が非凡だったそうで、非常に優れていたそうです。ですから学問も大好きで、知識に秀でて輝いていたのですが、しかしそれは学問として優れていただけではなくて、福音から学んだことを自分の生活の中に生きていた。キリストがおっしゃったそのことを知っていたのではなくて、生きていた印だと思います。続けますと大体 1195 年ごろに叙階されたであろうと、そしてそのころにオスマの司教座参事会の誘いを受けて、そ

これは 1196 年か 7 年らしいと、このあたりまでは全部「ころ」です。1201 年 1 月 13 日付けの文書に、オスマの司教座参事会の文書の中でドミニコが副院長としてサインしている、ということで、ここからは確かな日付になっていきます。ここまでは、ドミニコが信心深い家庭に生まれ、ごく自然のように司祭の道を歩み、叙階された、(ドミニコには少なくとも男の兄弟が三人いたのですが、三人とも司祭になっています。お兄さんは自分の生家で施療所を設けて、お医者さんであって同時に司祭であったようです。もう一人の兄弟はドミニコの会に入って説教者になりました) そういう道をまっすぐ歩いていたのですが、この 1203 年にひとつの転機があります。なぜここで変わるのかといいますと、ドミニコが自分で知らなかった非常に悲惨な状態、悲しみ、辛さに出会ったということで、変わるどころです。これはデンマークへの旅、外交的な御使いを司教様がカスティリアの王様から頼まれ、(こういうことは当時はよくあったそうですが、) 司教様がお供にドミニコを連れて、もちろんお供は沢山つれて、王様の御使いで王子様の婚約の相手と婚約をしてくるというのが使命でしたから、確かに引き出物や何かを積んで馬を連ねて行ったのだと思いますけれど、それがカスティリアからデンマークへ行く途中、フランスのトゥールーズに泊ったときに、そこにカタリ派という異端がはびこっていた。そしてドミニコたち一行が泊まった宿の主人もカタリ派であった、ということで、それまではうわさで聞いていただけで、知らなかったカタリ派の人と直接出会います。そして間違った教えを信じることによって、その人たちが神を、本当は愛の神、慈しみの神であるのに、そうではなくて恐ろしい、こういうことをしていたら罰せられるという捉え方をしているのをみて、神はそういう方ではないと、ドミニコはどうしても伝えたい、そしてドミニコはそのときはその宿の主人と一晩語り明かして、というのですが、(多分王様の御使いのご一行様をお迎えしてとても忙しかっただろう宿の主人をドミニコはそのあとをどこまでもどこまでも追

掛け回して話をしたのではないかと思うのですけれども、) 夜じゅう話してそしてついにその宿の主人が「ああそうか、神さまはそんな方ではない」と悟って変わったという経験をするのです。そして同じこの旅行の時にデンマークまで行くと、もう少し北はキリスト教を知らない人たちの国だということも目の当たりにしたわけです。ドミニコが生まれたカスティリア地方というのは非常に堅固なキリスト教、カトリック（当時はプロテスタントはまだ分かれてはおりませんので、みなカトリックな訳ですけれども）を選んだという誇りに満ちた地方でした。カスティリアというのはお城（Castle）と同じ語源で、そこは回教にならないためにお城、見張りのようなものが沢山あった地方です。その国から来たわけですから、カトリック以外のもの、まずは異端に出会った、それから北に行ったときにカトリックを知らない人たちの存在、それは出会ってはいないようすけれどもその人たちが時々、攻めてくるような話をドミニコは聞いたようです。ここでその人たちに何とかして神さまを知らせたいものだというのが、ドミニコの望みでした。その旅行から帰りまして、年表を追っていただきますと、1203年には婚約をして戻ってきた、1205年にはいよいよ王子様が十五歳で適齢期になられたので、ということはお姫様のほうはもっと若かったに違いないと思うのですけれども、いよいよお連れしに行ったところ、その旅行は、表向きはお姫様は亡くなっていたということで終わっているのですけれども。とにかくそのとき、王様にはその御使いを送って、司教様とドミニコの一行はローマに寄っています。ローマで何があったのかよくは分かりませんが、その翌年1206年の春、シトー会に行きます。昔は歩いて移動していたことを考えますと、そしてピレネー山脈のことを考えますと冬に動くことは不可能だったと思います。春でもこのときはまだシトー会にいて、春にモンペリエという地中海沿岸に近いところでシトー会の会合があってそれに出席しました。会合というのは、カタリ派異端に対してで、それを正当な宗教に戻

すための委任を勅使として受けていた人たちはシトー会にいたのですね。ところがなかなか良い成果があがらないということで、どうしようかという会合をしていたわけです。そこに司教とドミニコは居合わせます。ここでこの時以来司教もドミニコもこのカタリ派に対する説教団に加わることになります。それも今までしていたように勅使として馬を連れて、というそういう説教団ではなく、カタリ派がしていた良いところを取って、カタリ派がしているような質素な生活で、大改革をしてこの説教団に加わることになります。そこでプルイユの隠棲修道院が設立されています。日本でも隠棲修道院と言うのでしょうか、囲いの中のシスターたち、皆様はもしかしたらガレットでお馴染みかもしれませんが、日本には四つあります。盛岡と瀬戸と四国と会津若松の四ヶ所なのですが、一番先にドミニコ会の女子の修道院というのがこのプルイユに出来ました。男子の会が出来る前に女子の会が出来ています。1206年ごろと思われる。そこで司教もドミニコも対異端活動に従事するわけですが、そのうちに司教様は仕事からスペインに帰らなければいけなくなって、帰ってそこで亡くなってしまいます。それからシトー会の勅使たち、或いはそこから送られて一緒に宣教活動をする人たちもそれぞれいろいろなことがあると引き上げてしまっ、勅使の一人は暗殺で殺されましたし、一人は病気で亡くなってしまいました。引き上げていった人もいますし、ある時期ドミニコは一人になって、孤軍奮闘して自分の周りにはいる誰か彼かと説教をしていたようです。そしてドミニコとしてはこの説教を第一に考える人たちのグループが必要だと非常に感じていたわけです。せっかく何か成果があがりそうになると、修道会の用事があって引き上げてしまったり、期限がきたりしていなくなってしまう、そういう説教者ではなくて、説教を第一義にするグループ、これがいなかったらやはり対異端の活動は出来ないのではないかということで考えていたと思うのです。そしてまた教皇様もこのカタリ派（アルビジョワ派とかアルビ派とも言われま

したが) に対して十字軍を起こすという命令を出されましたが、しかし同時に説教によってその人たちに説き続けるようにとおっしゃったわけです。1215年に初めて、ドミニコと生涯ともにこれをやりますという仲間が二人現れました。こうしてドミニコのグループ、仲間と言うのが 1215 年に出来始めたわけです。トゥールーズ教区でまずは説教団として任命されました。翌年の 1216 年、トゥールーズだけではなくて、教皇からの確認を受けたと言うことで教区の中に限らず、どこにでも説教をしにいったよろしいというグループになりました。ですから会としての正式設立は 1216 年 12 月 22 日、そして次の年(と言うのは、設立が 1216 年の 12 月ですから、戻ってくるのが当然次の年になります) の 8 月 15 日にはもう最初に集まったグループの人たちをヨーロッパのあちこちに散らしました。これが世界大のグループになったという年になります。その後 1221 年にドミニコは亡くなっておりますので、会ができて丸 5 年もたっていないということになります。そして列聖が 1234 年、これは覚えやすい年なので、1、2、3、4、で 8 月 5 日、亡くなった日の前日に列聖されました。

さて、日本とのかかわりと思って年表の最後に載せておきましたが、先ほど田中神父様もおっしゃいましたとおり、1602 年 7 月 3 日甞島に五人のドミニコ会員が上陸。この甞島というのは鹿児島島の西の海岸のようなどころにある島なのですけれども、これは固有名詞なのでしょうね、「こしきじま」と入力して変換するとちゃんとこの字がでて参りました。迫害で途絶えましたが明治になって再入国、そこから今年が 100 年ということです。では中を開いて地図を見ていただきます。これは F L D というドミニコ教会の家族のグループの人たちがいろいろ工夫して作っていただきました。まずは世界地図、右側がヨーロッパで、その下にドミニコの生涯でいま申し上げたお話の中に出てくるような地名を(でてくるところは大変に辺鄙なところが多いので普通の地図をいくら見てもありませんので) 書き入れていただきました。一番左下がスペインで

カレルエガ、ドミニコが生まれたところです。大学があるパレンシア、陸の真ん中くらいにあります。ちなみにオレンジのパレンシアというのはマドリードという字が書いてあるちょうどその右側かそのあたり、地中海沿岸の温暖なところです。その北側はバスク地方になり、ピレネー山脈地方になり、バスク地方になると緑があるのですが、このカスティリアという地方は赤茶けた土地です。で右側にあるのがフランスでその下の方にトゥールーズがあります。カスティリア王国と言うのは結構強力な王国でした。それからフランス王というのも強力でした。そして両方の間に挟まったトゥールーズ侯の領地というのは、下がピレネー山脈、上はマッシフ・サントラルというやはり山です。そして右が地中海で左が大西洋、つまり通ridorの廊下みたいところで、いろんな思想が入ってきますし、文化も入ってきますし、そういう中で力も強くなかったトゥールーズ侯のところにあちこちから追い出されたカタリ派の人たちが集まってきた。そのトゥールーズの近郊というのがドミニコの最初の働き場所となります。それから右側にあるイタリア、ローマには何度か行ったことがあるようですし、ドミニコが亡くなってお墓があるのがボローニャです。さきほどのドミニコの絵があったサン・マルコはボローニャよりちょっと下の方といたらいいでしょうか。ヨーロッパの地図で見てくださいとドミニコが司教様のお供をしてこうやって行った、スペインからフランスを通りベルギーを通り、オランダを通り、今の国でいえばですね、デンマークまでおそらくスウェーデンの南ぐらいまで行ったかと思われます。そしてローマに下り、南フランスで活躍、そのあと馬も従者もすべてやめて全部足でこのスペイン、フランス、イタリアを歩き回ったのでした。

ということはこのバックにおいて、ドミニコが方向転換したのはカタリ派の正しくない神をいただくことによって苦しんでいる人たち、それを知ったということ、それがドミニコの生き方を変えました。ドミニコは自分の心に働きか

ける神の声、それに自分を任せて変えられるままに変わっていきました。ドミニコは活動をはじめてからは昼は人のため、夜は神のためと夜中祈っていたわけですが、おそらく大好きだったに違いない規則正しい平穏な祈りの生活にもどるためにオスマに帰るのを辞めて、南フランスに留まりました。これはこの人たちのためにこの状態を何とかしなければならないというドミニコの共苦共感の現れであります。

同時にもう一つ、これはドミニコがそうであり、ドミニコ会が今でも受け継いでいるのですけれども、教会の声に従う、先ほど歌った歌の中にも「教会の光」とあるのですけれども、「教会の中で」という立場をしっかりと守っていく、おそらく司教とドミニコは北方の蛮族といわれていた人たち、キュマンといふどこの人種かよく分からないのですが、キュマンと呼ばれていたキリスト教を知らない北方の人たちの所へ行きたいと願ったようなのですけれども、教皇がそうではなくて、今南フランスで非常に困っているあの人たちのために働いてくれないか、カタリ派（カタリ派というのは、悪の神、善の神というような考えになってしまう二元論なのですけれども）のために働いてくれないか、そこで働いて欲しいと言う要請を受けて、まずそこに行ったわけです。この姿勢はいまでもドミニコ会が保っていることです。いや、こっちの方です、というのではなくて、全体をみている教会の中での教皇の声には確かに意味があるのだというので、その教会の只中で働こうという姿勢、これはドミニコから受け継いでいます。これもですから、ドミニコを動かしたものの、哀れみの心と同時に、教会の声というのですけれども、すべてを扱うことは出来ませんのでこれ以上は触れません。

ドミニコは神が愛されるべきように愛されていないということを経験し、共に苦しむ、ミサのとき、祈りのとき、しばしば泣きました。イエス様もご自分の愛のメッセージを受け入れない、それに無関心なエルサレムの民のために

泣いたと福音にあります。これはマタイの福音書の中に「エルサレム、エルサレム、預言者を殺し、自分に遣わされた人を石で打ち殺す者よ、めんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはいくたびあなたの子らを集めようとしたことであろう。しかし、あなたがたはそれに応じようとしなかった（マタイ 23 章 37 節）」。

何度も何度も呼びかけていく、ドミニコも同じように何度も何度も呼びかけていきました。ですから異端者でさえも、ドミニコを愛したと言う証言が残っているくらいです。しばしばドミニコは兄弟たちの慰め手でした。誰かが悲しんでいるのを見ると、ドミニコは彼にかかわりました。彼に話しかけました。そして気を取り直して、神の摂理に信頼しなさいと働きかけました。

ドミニコの言葉は非常に優しく、また、苦しみ、痛みをよく察知していたので、悲しんでいた兄弟は、慰められ、力を取り戻して再出発したと伝えられています。

ドミニコは、「すべての人の救い」のためという信じがたい大望を抱いていた、ですから北方のキュマンのところに行く、行ったら殺されるかもしれない、現に殺されているのですから、しかし教皇がまずはカタリ派のところへ行って欲しいのだというのを受けて、まずはそこへ行ったのですが、キュマンのところへ行きたいと思いつけていたようです。ですから、ひげを生やしたという証言が残っています。当時キリスト教国以外の国に宣教に行く人はみなひげを生やすというのが習慣だったそうです。そういえばパリミッションの神父様はみんなひげを生やしていらっしゃいましたから、いまでもそうなのかもしれませんが。特に回教の国に行くときには、向こうの師はみなひげを生やしていたようで、生やしていないとだめだったようで、ドミニコもひげを生やしていたのですが、結果的にはドミニコは行く時間が無かったし、総会議の時に自分は会長をやっていくにはもう体力的にも無理なので、代わって欲しいと申し出たのですが、兄弟たちが受けってくれなかったのが、会の組織固めをずっといたしまし

た。でもドミニコがまだ生きている間に、おそらく 1218 年にすでに最初の兄弟がスウェーデンまで行っています。スウェーデン人の兄弟だったと思います。

ドミニコには自分の望みがあり、その望みと言うのは苦しみ、痛みで動かされた心からでた望みであり、そしてまた、教会の中での位置付けと言うものを非常に大切にしていたと言っていいでしょう。

最後に、十七才位の時にローマでドミニコに出会いドミニコの手の中に誓願を立てたという隠棲修道女のシスター・セシリアという人がいろいろなドミニコの思い出を伝えているのですがその面影をお伝えしたいと思います。

「背は中くらい（ちなみに背は 165、6 センチだったらしい、それは現在残っているエックス線でみた骨からの再構成でそれくらいだったらしいです）、体はやせて、顔は美しく少し色づいて、頭髪とひげはやや赤褐色、美しい目、彼の額とまつげからはある種の輝きが放たれて、すべての人に尊敬と愛の念を起こさせました。彼は常にほほ笑み、喜ばしげでした。ただ何か隣人の悲嘆を見ると心を動かされ、共に悲しむのでした。彼は長くて美しい指をしていました。声は大きく、美しく、よく響きました。彼は禿げていませんでしたので剃髪は完全で、少し白髪が混ざっていました。」

あの時代の中でドミニコは自分の心を動かされたものに対して、イエス様になさったように行動に移していった。その行動が結果的には説教者会を作ることになったのですが、もう一つドミニコについて言えることは、ドミニコはいつもそういう周囲の状況の中で教会の中で呼びかけられているその声に応じて神の使命がはっきりとそのように示されて行き、そしてそれに従順でそれを完全に成し遂げていった、ということが出来ると思います。哀れみの心から発して、しかしそれは実りの無い単なる同情ということではなく本当に福音の中のキリストのように行動に移し、そのときそのときの呼びかけに応えることで、神の使命が示され、実現されていった、そういう方だと思います。現在の我々

もほんとうに悲しいことが沢山あるような世界ですけれども、この世界の中で呼びかけがあるわけで、違うところから来るのではなくて、今の世界の中から私たちは呼びかけられているわけですから、その中で自分が語りかけられているものに応えることで、やはりドミニコがその時代にしたように、いまこの神から呼ばれている使命を果たしていくことができればいいなと思います。

では先に申し上げましたように、ご質問がおありでしたらそれにお答えしたいと思うのですけれども、勝手にしゃべりましたので、皆さんが聞きたかったことに答えているかどうか全然わかりませんので、お願いいたします。

(質疑応答)

(質問) 今日はお話どうもありがとうございました。先ほどのお話の中でカタリ派という異端の清貧な生活を送っている人たちを改心させたというのが聖ドミニコであったというお話でありましたけれども、もし現代にドミニコがいて、この東京のこの地でですね、おそらくカタリ派とは全然ちがう環境にあって、満ち溢れて、満ち足りた、成熟した物のあふれたこの東京に聖ドミニコがいたらどんな説教をされたのかなあといい、お伺いしたいのですが。

(回答) それは私がこんなです、とお答えできるようなご質問ではないので、皆がドミニコの精神を自分のものとしていったときに、自分が今置かれている中で自分に何が出来るかなあということを探していくことだと思うのですけれども。まあ一ついえることは、ドミニコはいつでも、結局異端の人たちとも、つまり立場の全然違う人たちとも話すことが出来て、そして相手の心が変わっていったということは、対話が成り立ったということだと思うのですね。時々

私たちは自分が言いたいことは言いますけれども、そして相手も相手の言いたいことは主張しますけれど、平行線で終わってしまうことがままあるのではないかと思います。ドミニコはですから自分の兄弟たちをまず勉強に出しました。それまでの修道会では手仕事と祈り、「仕事と祈り」というのが修道生活の基本だったわけですが、ドミニコの会では手仕事ではなく勉強、「勉強と祈り」です。なぜならばその勉強によって神についてより深く知ることによって、すべての人は神の似姿なわけですから、彼も神の似姿、私も神の似姿だったら、どこかに共通点があるわけですから、そこから話していく、そこを見つけていく、そして対話を成り立たせることによって、相手が思っていることが私に伝わり、私が思っていることが相手に伝わるためには、相手の思っていることも伝わらなければいけないわけで、一方と言うことはありません。「なぜわからないのか」ということは言う権利が無いと思うのですね、私があの人をわらないならば。そういう、なんとかして、どこかで共通点を見つけて高みにおいて相手と交わることによって一番大切なものを呼び起こすということが必要なのではないかと思うのですけれども。そしてその次にくる結論というのは、それぞれが出すのではないのでしょうか。

(質問) ドミニコ会がフランシスコ会の修道士、神父を食事に招待したときにドミニコ会の観想修道会の修道女たちがご馳走を作るのだけれども、彼女たちは食べないのはなぜなのか。

(回答) 観想修道会というのは私たちよりもっと昔のスタイルを守っていらっしゃると思います。私たちももう何年前といいましょうか 10 年、20 年前といいましょうか、私たちも一緒に食事をしませんでした。作りましたけれど、

出しましたけれど、一緒に食事をしませんでした。おそらくそのスタイルを守っていらっしゃるのではないかなと思いますが、物事が良くわかりませんので、正確なお返事ができません。

(質問) 年表を拝見しますと列聖されましたのが 1234 年になっております。そして日本に、甌島にドミニコ会の修道士の方たちが上陸したのがさっき計算してみたのですが、368 年たってからのことなのですね。でこの間、ドミニコが亡くなってからドミニコ会が日本に来られるほどになっていたというのはどうということだったのかということをお最後の質問にしたいと思います。

(回答) ドミニコ会士は、ドミニコが亡くなったすぐあとから東西南北に散っていきました。ドミニコが生きているうちからすでにイギリス、ポーランド、それからアフリカの方にも行ったようですが、中国までも行ったといわれています。もともとはドミニコ会士は 1 年に一度また戻ってきてボローニャかパリで総会議をしていたのですが、だんだん遠くまで行った兄弟は戻って来られなくなったと言っていました。そのドミニコの兄弟が四方に散っていったときの特徴の一つは、たとえば当時でしたら回教徒というのは絶対にけしからん、今でもやっていますけれど、敵であるというふうに、ですからどうしても軍隊を起こしても絶対にそれに勝たなければならない、そしてキリスト教の人が回教徒に捕えられたり、奴隷になったり、まあお互いに、そういう時代であったにもかかわらずドミニコ会士が何をしたかということ、アフリカに行って、回教の勉強をする学校を作りました。向こうのアラブ語を学び、向こうの人たちが何を考え、何を信じているのかを学ぶ学校をつくりました。そういう形でもって入っていったのです。ですからドミニコが最初にアルビ派に対する十字

軍に行かないで、そうではなくてやはり自分たちが確信を持っているその愛の神を伝えようとしたその同じ精神を次の時代の人たちも持っていたと思います。一時期中南米でいろいろなことがあった中で、やはりインディオも人間ではないかと言い出したラス・カサスもドミニコ会士です。そういう面から働こうとしていたと言えると思います。このころにやはりフィリピンの方から多分ドミニコ会士も日本を知って、日本に移ってきたのだと思います。